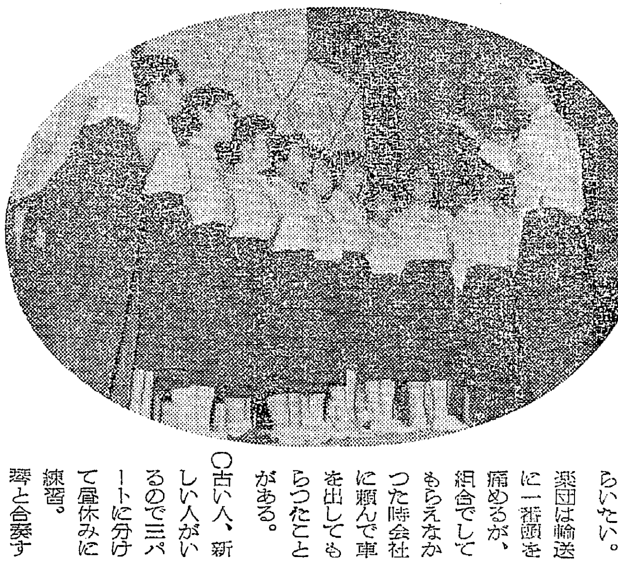
変な目で見られる川柳

各サークルの実態を探る

いまサークル活動は各支部によつてまちまちであるが、将来は各サークルの横の連絡をとりながら協議体への編成を考えられている。教宣部ではその足がためとして各サークルの実態調査や代表者会議など開きサークル自体の日常活動や執行部への要望などを集約しているが、集つた各支部のサークルの現状をみてみよう。（写真＝うたごえサークル）



現在活動しているサークルは

美術＝（宮浦、三川）
音楽＝楽器（三作、三川）
合唱＝（三作、三川、宮浦）
文学（総合＝三作文学サークル）
俳句＝四山ありあけ俳句会、四山円虹の会
川柳＝みかわ川柳同好会
園芸＝（四山花弁園芸会）
演劇＝（三川真珠会）
写真＝（三川）などである。

まず一番問題となる集合の状態は必要に応じ年数回（美術、真珠会）月二回（三作楽団）月八回（三作合唱）必要に応じ年四回（三作文楽）月四回（三川合唱）など月二、三回が多く、不定期に年数回開くなどに大別される。

サークルの当面している問題点をとつてみると、サークルらしいサークルにすること（宮浦美術）練習場が不定だ、これを解決すれば会合ももつとよくなる（三作合唱）文化祭に対する企画（三作文学）サークル誌発行について経済的に困つている、青年層が少い（ありあけ俳句会）組合員や主婦の間で俳句が組合運動にプラスしないと思われている（円虹の会）種類について調整に困つている（花弁会）川柳に対する間違つた考えは一掃してもらいたい（みかわ川柳）指導理念を明らかにしすぎると消費趣味的な考えを持つた会員とにマサツがある（真珠会）会費徴収給与天引（三川写真部）など、それぞれの悩みをかかげているのも見逃せないものである。

文化資金に一考を

日常活動や執行部に対する意見としては

○日曜を利用して練習している。執行部ももう少し関心をもつて協力してもらいたい。

楽団は輸送に一番頭を痛めるが、組合でしてもらえなかつた時会社に頼んで車を出してもらつたことがある。

○古い人、新しい人がいるので三パートに分けて昼休みに練習。琴と合奏することが多いので先生への謝礼に頭を痛めている。文化資金の補助は所要経費の三分の一位にしか当らない。せめて半分欲しい。組合からは協力してもらつているがニコースカー三輪車の借用をお願いしたい

○文化資金の性格と現在の運営についてよく分らない。
○サークル全体に対する執行部の育成方針が欲しい。
○執行部の担当者が変るごとにサークルに対する態度が変る。一貫した方針が欲しい。
○せめて年一回ー二回の総合サークル紙発行はいいのではないか
○このような会議を年四回位開いて話合いをつづけながら機が熟したらサークル誌発行にもつていつたらどうだろうか。

などの要望が出されている。

映画

温いパリの下町もの

ルネ・クレール監督『リラの門』

かいせつ （仏）名匠ルネ・クレールが、得意のパリ下町にカメラを据えて描いた善意と愛の佳作。出演は名優ピエール・ブラツスールにシャンソン歌手ジヨルジユ・ブラツサンス、ダニイ・カレルなど

おはなし 酔払いジユジユは愛すべきロクデナシだ。彼のただ一人の親友〃芸術家〃の家にお尋ね者バルビエが逃げこんでくる。ジユジユはバルビエのための親身に世話をやき、高飛びの手助けまでする。ジユジユが秘かに愛していたバーの娘はバルビエをいつか愛するようになつたが、バルビエは彼女を高飛びの金を巻上げるため利用するだけ。それを知つたジユジユは娘にその愛が幻滅であることを知らせたくないばかりにバルビエを倒して金をとりもどす。しがない人たちが、さりげなく温め合つて暮しているパリの下町の情感がしみじみと流れている。

ジユジユの親切心が裏切られてゆく寂しさ。バーの娘へのほのかな愛情。そして無力で、善意だけに支えられて生きている者の悲しみと哀れさを、いたわるようにルネ・クレール監督は描きあげている。

（1日より大牟田・荒尾名画座）

創作 ＝入選三席＝

二代目

永田光次

「一休みやろう。」先山の汗に汚れた黒い顔がいつた。

文夫は切片をとつて腰をおろし防塵マスクを外し大きな息を吸込んだ。

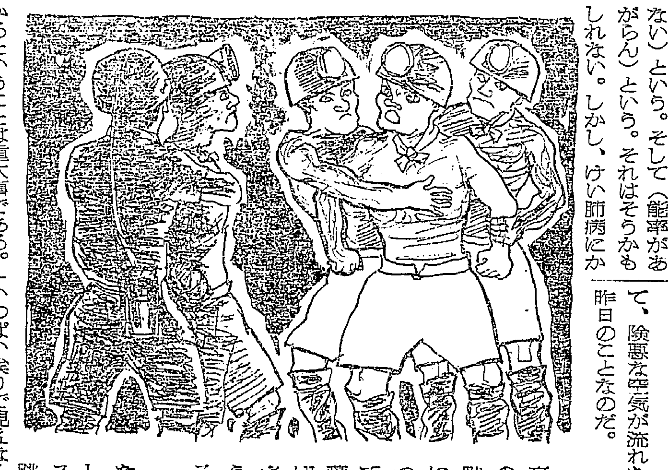
マスクをかけて作業すると息が苦しくて苦痛だ。汗が、あとから吹出る。シャツの袖口で拭取つた汚れと汗のザラツとした感触が頬に伝わつた。

先山の汚れた鼻の低い四角な顔から汗が流れている。今朝、配役されてからまだ文夫はこの先山と口をきいてはいない。口をききたくないからだ。炭鉱に勤めて二十年ときいた。背の低い横の張つた頑健な体格。いわゆる坑内向きという身体である。ー山中習三ー、これが先山の名である。みんな、四角な顔と田のようながつちりした彼に、「カニ」というアダ名を呈している。

文夫がこの「カニ」と昨日口喧嘩した同じ現場である。第三上層五昇右三片、これがこの呼称である。摂氏四十四、五度もある非常に暑い個所で、ちよつと動いただけで汗がだくだくでるひどい作業現場である。奥の採炭小切羽に通じるこの片盤坑道の地下げが文夫達の作業だつた。

「カニ」のまつくろい顔が動いた「やるばい」ぽつり帰捨てるようにいつて立上つた。文夫はゆつくり立上り、マスクをかけた。「カニ」のスコツプはもう動いている。スコツプを跳るたびに埃りが舞上りあたりに広がる。文夫のキヤツプランプの光芒のなかに、舞上つた無数の埃りが浮遊している。多少の相違こそあれ坑夫達は毎日この埃りを吸つているのだ。文夫はむしようにはらだたしさを感じ、やけにスコツプを跳た。勢いにのつたボタはコンベアーのトラフから半分ほど外へこぼした。

坑夫達の大半以上がこの埃りを問題にしていない。第一この「カニ」がその標本見たい。文夫はそれ、けい肺予防思想をまきちらすのであるが、徒労におわつている。会社のけい肺予防対策は表面だけはととのつている。つまり、機械的防塵設備はできている。しかし、内面的なもの「予防思想の徹底、徹底した防塵処置」こういつた面はいまだ遅しである。だから、この標本見たいな「カニ」がのさばる。頭を打つような低い天井の施枠のハリに散水パイプも通つているのだ。文夫が充満する埃りに水をまこうといつて埃りのない空気を吸つて気持のよい作業をしたらいいのだ。



ところが「カニ」は、（こんな仕事つに水をまきおつてどうするか、誰も水をまいてするもんはいない）という。そして（能率があがらん）という。それはそうかもしれない。しかし、けい肺病にかかるということは重大事である。能率、非能率の問題ではない。けい肺病は不治の病いであり死を意味する。

「カニ」の今日一日能率をあげ一円でもよけいに取ることが大切と思う、刹那主義的な考えをこさい粉砕してやりたい気が、文夫の細面の汚れ顔に湧き（水をまかんでやつてどうするんだ。けい肺に早よなるぞ、俺ア嫌だ）「カニ」の渋面が（俺ア、坑内下りして二十年になるばつてん、水をまいたりマスクをかけて仕事つをしたことがなか。そう簡単になるかい）（いつぺんにならんでもながか月日のうちにやけい肺になるとたい。このわからずや）（なんだと）二人の怒声が狭い坑道に反響して、険悪な空気が流れた。それが昨日のことなのだ。

それ以来文夫は無言の行である。黙つて坑内に降り、黙つて仕事している。言葉をかければ腹立たしさが増すような気がする。

文夫はやたらに鶴はしを打ち、スコツプを跳た。坑道いつぱい埃りで見えなくなれ。ー山名習三なんてちやんちやらおかしい。「カニ」のカニ名悪ゾウだ。思う存分埃りを吸え。たちまち肺臓いつぱい埃りでうずめてしまえー。そんな荒々しい反発心が文夫の胸を煽つていた。なにものかに対する怒りかもしれない。

文夫はそんな荒々しい気持のなかから、死んだ親父の血の気のない幽鬼のようなやせ細つた面影が浮んだ。肺病特有のかるい咳が、時おりコホンコホンともれていた。文夫がお茶を持つていつてやると、親父の瞳が感謝に光つた。瞳だけは健康人のように光つていた。ものいうのもきつそうな親父は、ときれときれの息の下からよくいつた

（おまえも俺と交替で炭坑で働いてもらわにやならんが、けい肺にだけはならんように注意してくれ。俺アこの三十年ひと一倍よく働いて会社に尽した。だが得たものはけい肺という死病だけだつた。そして会社は公傷にもしてくれん。私傷で養生にだいぶ金を使いこんだ。けい肺になつちやなんにもならん…ならんこつだ。埃りを絶対に吸わんようにやることだーと。

それからまもなく親父は死んだ。死のちよつと前文夫は入替採用された。そして坑内というものの実状を始めて見た。そして「カニ」の存在もしつた。

憎いー。こいつのような奴が親父を殺したんだ。なにか大きなものに対する怒りが、唯一の「カニ」の存在に集中されていたのである。

文夫のスコツプは機械のような早さで風下の方にいる「カニ」の方へ跳ねあげ、コンベアーには三分の一もは入つていなかつた。渦をまいて見えない塵埃のなかから

「むちやするなつ」

大きな怒声といつしよにスコツプが飛んできた。ズキンと向ずねから劇痛がきた。

「ちくしよう」

文夫は塵煙の黒い影に飛びついた。「カニ」の頑健な身体も文夫のじゆう道初段の腕前にどつと倒れた。コンベアーの流れと側壁の三尺ばかりの狭い坑道で文夫と「カニ」の殴り合いが始つた。

「坑内で喧嘩すんなつ」

そんな声を聞き、文夫は強い力で引離された。

「カニと肺恐怖症ぞ」うしろの方で声がした。周囲に五、六人の坑夫達がきていた。引離された文夫と「カニ」の荒い息つかいが周囲に散つた。「カニ」の横びんから血が流れている。

「いつたいどうしたつか？」係員の横田久平の心配気な顔が立つていた。文夫も「カニ」も黙つてにらみ合つていた。ものをいえばまた二番相撲が演じられそうで、お互いに牽制し合つたまま沈黙が流れた。

「とにかく見張へ行こう？」横田久平の命令的な塩から声が響いた。

文夫は坑内人車にゆられながらみんなといつしよに昇坑していた。ガタンガタンと動揺する人車のゆれにもいつもと違つた感じが心をかすめる。喧嘩した後味のわるさかも知れない。けれど、胸につかえたものを吐き出したすつとした快感が心を領しているのがほんとかもしれなかつた。

よかれあしかれ人がなんといおうと俺のやつたことは正しいことなのだ。まだまだ「カニ」のような奴がうんといるんだ。こういつた古いものを是正しなければならない。今度の事で賞罰委員会にかけられてもいい、俺は負けない。そして、けい肺という職業病を坑内から追放することだ。それが親父の霊に報ることであり、親孝行かもしれない。親子二代の炭坑マンはしかたがないかもしれない生活のため。しかし、けい肺二代目は絶対嫌だ。文夫の細面に生気がみなぎつたとたん、ズキンと向ずねが痛んだ。坑底に着いたのである。

シヤバへ出た。坑内下りだけしかあじあえない心よい気分がすつと流れた。冬の早い陽はあたりの建物の輪かくをぼやけさせていた。文夫は空へ向つて、黄昏の空気を腹いつぱい吸いこんだ。その後から、親父が死んでめつきり老けたおふくろの痩顔が眼に浮んだ。

選評

野間宏

「二代目」（永田光次）三位。けい肺でたおれた父をもつ入替採用者の若い労働者が「カニ」というあだ名の、けい肺に無関心な先山と坑内での争いを描いている。決して二代目にはなるまいとする主人公の気はくが、争いを中心とした場面の簡潔な鋭致ににじみ出ている。カニの特長はかなりよく出されているが、このように少しでも能率をあげて稼ごうとする職場の矛盾についてももつと深くさぐり出さなければ主人公の叫びは、ひとつの叫びだけにおわつてしまう印象をあたえる。

囲碁教室 (40)

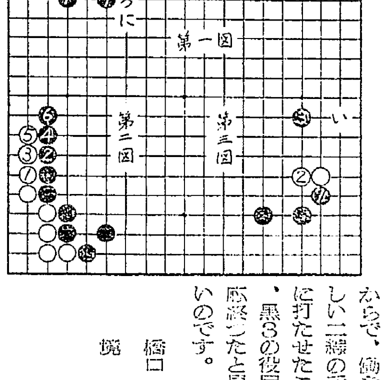
二線は敗線

布石時代や中盤戦の初めに、第二線に石を打つことは好ましくありません。特に第三線を相手に押されて、第二線を低く何本もはわれるようでは、その碁には勝てないといわれる程、不利とされています。

第一図、高目ケイマが定石の変化の一つですが、白8の時黒9とノビ出すと、白10と押さえられて、勢い黒11と曲らざるを得ません。そこで白12とノビた時黒いと切り、白ろ、黒は、白13の時に、黒にと白6、ろの二子をシチョウにカケて取れない場合は、嫌でも13以下21まではわなければ、この黒に活きがありません。然し活きた所でこちらのは、一手一目にしかつかず、その上少しも外に響きません。これに反して白の壁面の中原に及ぼす威力は、未知数とはいえ大変大きいものです。

第二図、三々打込みから生じた形です。白1はこの点を先手で黒から押さえられるのを防いでまあいいとして、3、5と押して黒4、6とノビさせるのは中央の形の決らない初期の段階では、徒らに黒を厚くするだけで、一手毎に損を重ねるものです。

第三図、黒3と高くハサむのが大変きびしい手です。黒3が高いだけに、白が上方へ逃げ出すのに骨が折れるわけです。もつとも将来いの点が補強きの欠点として残りますが、3の後白いと走ることはあまりありません。それは序盤時代の二線の着手はよくないという考えからで、働きに乏しい二線の手を白に打たせたことで、黒3の役目は一応終つたと見てよいのです。



橋口 初誠

成人祭を挙行

天道校区地域公民館連絡協議会と地域分会連絡協議会とで二十六日校区内の成人祭を行う。地域としては初めてのことである。